

中国における「随班就読」のシステムについて

The system of Learning in Regular Class in China

呂晓彤

Xiaotong Ro

帝京科学大学

Teikyo University of Science

Key words: 中国, 随班就読, システム

目的

近年の中国は遅々としながらも着々と特別支援教育を整備している。就学できる一部の障害児に対して、教員の専門性が欠如している中、障害児の周りに存在する資源を活かし、健常児童生徒の力を借りながら、障害児の学校生活がスムーズにできるように学校全体を中心に地域との連携も積極的に取り組んでいる。一方、通常学級における発達障害児の対応は日中とも様々な課題を抱えている。特に日本の場合、通常学級における発達障害児童を中心に不登校問題が大きく取り上げられている。本研究は中国における通常学級のシステムを紹介して、中国と日本における特別支援教育の課題についての示唆を得ることを目的とする。

内容

2010年、国家教育委員会が制定・実施した「中国中長期教育改革和發展规划綱要(2010~2020)」では、特別支援教育学校数の増加とともに、教師の専門性の向上や「医教結合」における教育の中のリハビリシステムの体制の形成を強調した。また、『2013年工作要点』にも「医教結合」を有効に実施するように示した。

「医教結合」とは、2009年中国教育部基礎教育二司(日本の文部科学省特別支援教育課に当たる)が部分省・市教育庁に発布した実験的な法令である。「医療(主にリハビリ)」と教育を有効に結合し、個人差を尊重して、個別ニーズに応じた教育形式をとること。「医」では、児童の身体状況を把握し、障害疾患を厳密に検査・診断し、それに応じた治療を行う。主に作業療法(OT)、理学療法(PT)、言語聴覚士(ST)を用いる。「教」では、授業を通して、最低限な学習と生活技能を身に付けるようにする。医教結合の基本形式は主に早期療育、義務教育、職業訓練3つある。

医教結合制度の形成の可能性として、個別ニーズに応じられるように、教師、医者、ソーシャルワーカー、保護者の参加を推奨し、在校児童を多方面から支援を行う。また、医療と教育の連携をスムーズにするために、特別支援学校内にリハビリセンターを設置する。そのことにより、保護者と障害児の負担減少およびリハビリの効果を高めることも狙いであり、情報共有しやすくなる。また、特別支援教育専攻のカリキュラムを改定し、伝統中華医学の内容を取り込む。現職教師に対して、研修内容に医学知識を加え

る。特に、修士と博士課程の学生に二つの学位を取得できるようにハイレベルの専門的人材を育てる計画もある。

考察

医教結合の実施にあたって、最も問題になるのは人材育成の不足である。師範学校の数を増やすと同時に、医学校と連携し、共同で特殊教育人材を育成するのは目標であって、実現するにはまだほど遠い。

「障害者権利条約」の加入によって、障害児の診断から成人施設の整備まで、障害児・者のQOLの向上につながる医療機関や教育機関など関係機関の連携が求められ、これまでに谷間に置かれた自閉症スペクトラムを中心とした発達障害児の入学が大きな課題として取り上げられた。「医教結合」の試みは教育と医療分野の連携を強く求められ、医療と教育共通の人材の養成は緊急な課題としてあげられた。現職教師の研修内容の質と期間は、制度の変化によって、より高く、長く求められ、元々人手不足の現場では、どう対応するのかは難しい課題である。

日本においても、養護教員の役割や対応など課題を抱えている。また不登校問題も難題である。中国の通常学級を見学する際に、ほとんどの障害児童にピアサポーターがついている。児童同士で楽しく会話しているし、クラス全体が障害児に配慮している雰囲気を感じる。さらに、中華医学を専攻する教員がすぐに児童の不調に気が付くため、パニックがあまり見当たらなかった。今後クラスにいる「助学伙伴」(ピアサポーターと称する)の選抜やサポート状況などを調査し、日本における発達障害児中心に不登校問題の対応の手かかりを探りたい。

注1:「助学伙伴」というのは中国随班就読の中に最も特徴がある障害就学児童の対応形式一つである。同じ学年、同じクラスの隣席に、学校生活や勉強をスムーズに運べるために、学業を優れている生徒がサポートをしてくれる体制。

参考文献

1. 彭霞光: 中国残疾児童随班就読現状和未来發展建議、現代特殊教育、総第228期、pp19-21、2012
2. 王紅霞・彭欣・王艷杰: 海淀区小学校融合教育現状調査研究報告、中国特殊教育、2011年第4期、pp37-41、2011
3. 謝敬仁他: 中国特殊教育新進展、高等教育出版社、2013